

大人・社会に求められること：少年鑑別所の現場から

黒 澤 良 輔

Effective Countermeasures against Juvenile Delinquency based on Juvenile Classification Home's Experiences

Ryousuke KUROSAWA

1 はじめに

質問：正しいものはどれか？

- (1) 少年鑑別所に少年を収容する目的は、罰を与えるためである。
- (2) 犯行時 14 歳の少年は、懲役刑を言い渡されることはない。
- (3) 少年院を出た少年のうち、約半数の者が再び施設に収容される。
- (4) 非行の原因は家庭にある。

答え(1)～(3)は、いずれも正しくない。(4)は意見であり、正誤の判断にはなじまない。金沢大学大学教育開放センターでのミニ講演の内容等を下に、拙稿「少年の再出発を支援する：少年鑑別所の現場から」¹(以下「前稿」という。)では、上記の質問を挙げた後、①少年鑑別所の役割、②少年鑑別所に収容された少年たちの特徴、③少年鑑別所が当面している課題、④少年の再出発を支援するための取組みについて説明し、特に少年に対する就労支援策等について述べたが、本誌に寄稿する機会が与えられたので、前稿では紙幅の都合等で省略せざるを得なかった点を中心に述べたい。

本稿では、少年鑑別所は一般的になじみの少ない施設であるため、再度①少年鑑別所の役割について簡単に説明した後、②少年鑑別所での少年たちの変化と実社会で求められる力との関係、③「わかる」(心理学的理解)とは何か、④少年たちの立ち直りのために、今、大人・社会に求められることについて述べる。

なお、文中の意見にわたる部分は筆者の私見であり、作文等は、筆者の創作であって実際のものではないことをお断りしておく。

2 少年鑑別所の役割

少年鑑別所は、1945年に各都道府県庁所在地等に設立された法務省所管の施設であり、心理アセスメント専門機関としては最も歴史のある国の機関のひとつであるが、その実情や役割について最も理解されていない施設ののひとつでもあろう。そこで、少年刑事司法における少年鑑別所の位置づけ、少年鑑別所における心理アセスメントの流れのポイントを挙げると、次のようになる。

- 少年鑑別所は、家庭裁判所の審判の準備のために、少年を短期間（通常約4週間）収容し、心理アセスメントを行い、その結果を鑑別結果通知書として家庭裁判所に提出する機関である（図1）。
- 長い歴史の中でアセスメント過程は体系化されており、面接、心理検査、医務診断、行動観察、家庭裁判所調査官とのケースカンファレンス等、少年を理解するために多角的な情報が活用されている（図2）。
- 少年の法的身分（審判前）に鑑み、少年鑑別所において、教育的な働きかけを一義的に行うことはできないが、これまでの生活環境から離れ、静かで規則正しい生活を送ることは、少年たちにとって、これまでの生活を振り返り、今後の生活を考えるための大きな転機となることが多い。

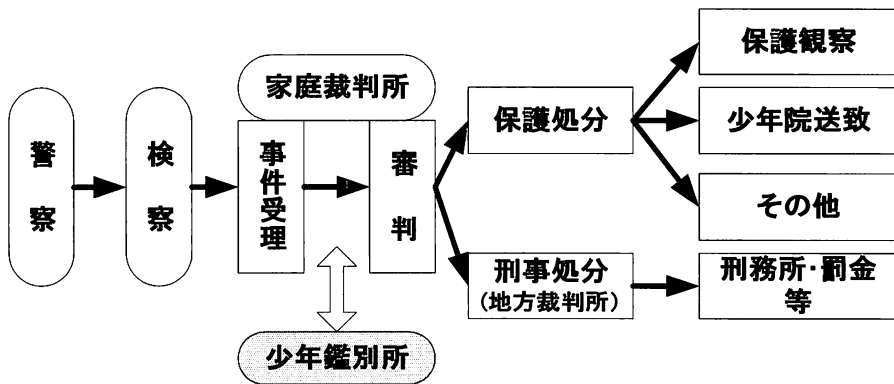


図1 少年鑑別所の位置づけ

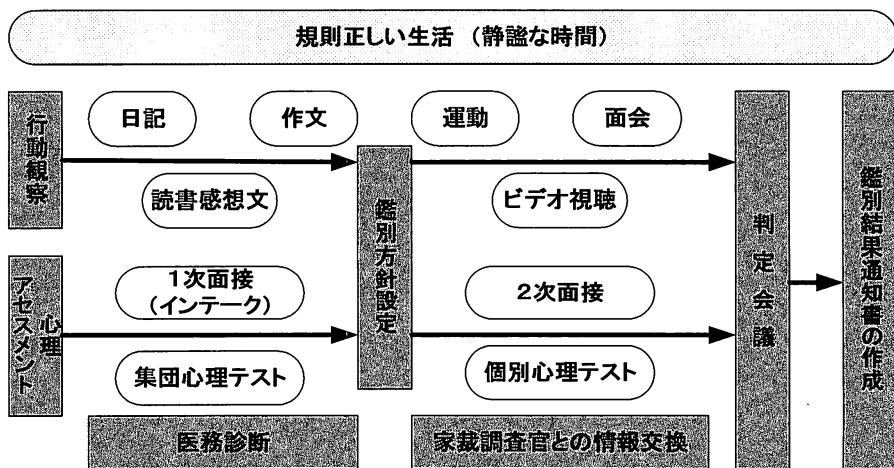


図2 少年鑑別所におけるアセスメントの流れ

3 少年鑑別所での少年たちの変化と社会で求められる力

次に、少年鑑別所の現場から見た入所少年の特徴と所内生活中の変化について述べる。

入所した少年たちからよく聞く次のような言葉を例に、少年たちの特徴を挙げると次のとおりである。

- 「(恐喝の) 相手が怖がるのがストレス発散だった。援交(援助交際)の相手はチャホヤしてくれるから(やめられない)。」→自己中心性
- 「絶対に見つからない自信があった。みんなやってる。捕まるまでたいしたことだとは思わなかった。」→規範意識の乏しさ
- 「大人はわかりきったことをへらへら言う。たいていの人は見ても見ぬ振りをする。」「クラブを辞めたら、学校へ行く意味がなくなった。どうせ自分はバカだから。」→大人・社会に対する不信・落ちこぼれ意識

しかし、そうした少年たちも、少年鑑別所に収容されている間に大きなこころの変化を見せる。そうした変化を表すものとして、作文例をいくつか挙げる。

「鑑別所に入って、今、あなたの気持ちは」

- 鑑別所の中は汚いと思ってたけど、意外ときれいだったのでびっくりした。なぜか家よりここの方が落ち着くのは不思議だ。家では、少しでも言うことを聞かなかったときは、怒鳴られて殴られた。私は好きで不良をしているわけじゃない。現実から逃げているだけ。先生はこんな私の気持ちわかりますか？ 誰も信用できない気持ち、自分が嫌いな気持ちわかりますか？

「母について」

- 私は、お母さんがあまり好きじゃなかった。でも、今は違う。この前、面会に来てくれた時の涙は一生忘れない。お母さんは、ふだん私には、弱音をはいたりしない人だけに、あの涙は、私にはとってもつらかった。

「調査官の面接」

- 今日、調査官の人が面接にきた。私の話を真剣に聞いてくれたから、とてもうれしかった。自分が心の中でためているものを全部話した。今まで私の話を真剣にきいてくれる人はいなかったのに、今日初めて、私の気持ちを素直に人に言えた。

「高校時代の思い出」

- 今日ふと、まじめに剣道をやっていた昔の事を思い出した。そのころは、ほんとうに楽しかったし、心から剣道が好きだった。だから、部活が終わって、みんな帰った後も、習った事を一人で練習していた。その頃の自分は輝いていた。今とはまるで違っていた。あの頃のように自分が輝けるものを、もう一度見つけたい。

「仕事紹介のビデオを見て」

- 僕はこのビデオに写っている人たちは自分の仕事、自分の会社にすごく誇りを持っていると思った。僕は、今の仕事を誇りに思ったりしたことはない。仕事は僕にとって生活のためにしなくてはいけないものだと思っていた。だけど、このビデオを見て、もし鑑別所を出られたら、今の仕事にもっと誇りを持とうと思った。

「審判を前にして」

- 両親の気持ちを考えられたこと、新しい自分を見つけたこと、気持的に大人になれたこと、毎日を一生懸命に生きようと思えるようになったこと・・・まだまだある。勉強より大切なことがいろいろわかってきたかなと思う。

こうした作文例に見られるように、入所したときには荒んだ表情・態度であった少年たちが、大きなこころの変化や成長をみせることに、少年鑑別所で勤務する職員は驚かされる。こうした少年たちのこころの変化は、梶田²及び清永³を参考にすれば、①自分自身との対話を始める、②社会には善悪の物差しがあることを肌で知る、③親・大人・社会との関係を再構築する、とまとめることができよう。

ただし、犯罪白書（平成 17 年版）⁴によれば、少年院出院後 5 年以内に再入院した者は約 16%、刑務所に入所した者は約 9～12%であり、合わせれば約 4 分の 1 の少年が再び施設に収容されている。少年鑑別所や少年院で勤務していると、施設の中では大きな変化や成長を見せながらも、実社会に戻るとたちまち失敗し、施設収容を繰り返され、次第に可塑性を失っていく少年に出会うことも多く、施設内での変化や成長を実社会の中で活かす方策こそが求められていると感じざるを得ない。

そこで、そうした方策を検討するために、まず、以上述べたような入所少年の特徴、少年鑑別所内での変化、実社会で求められる力の関係について、図 3 にまとめた。

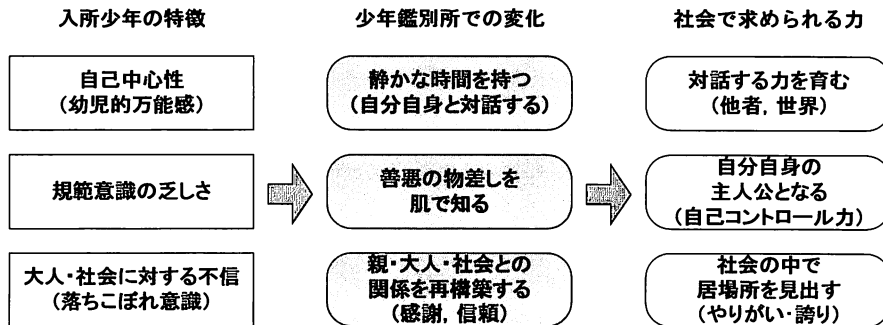


図3 少年鑑別所での少年たちの変化

ただし、これだけでは具体的に少年たちにとってどのような「社会で求められる力」が期待されるのかわかりにくい。そこで一般の論考を参考にすると、昨今、少年たちが社会の中で求められる力については、「人間力」⁵、「コンピテンシー」⁶、「社会人基礎力」⁷などと議論がかまびすしい。しかし、それらは、順境にある少年にとってはふさわしい課題となるかもしれないが、恵まれない環境にいたり、いったん通常のルートから逸脱したりした少年たちにとっては、もう少し基本的な事柄から、段階を踏んで示すことが必要ではないだろうか。そこで、少年鑑別所の現場での経験を下に、少年たちが実社会の中で立ち立っていくために身に付けるべき力を図示してみた（図 4）。これはアイデアにしか過ぎないが、回り道をしている少年たちに対しても、生活や対人関係の基本から具体的な目標・課題を与え、進歩や改善の成果をきちんとフィードバックし、徐々に少年なりに自信や意欲を育んでいくよう働きかけること、そして、その成果を学校や職場

で実際に試しながら身に付けていけるような、実社会での立ち直りに役立つプログラムを作成することが求められている。

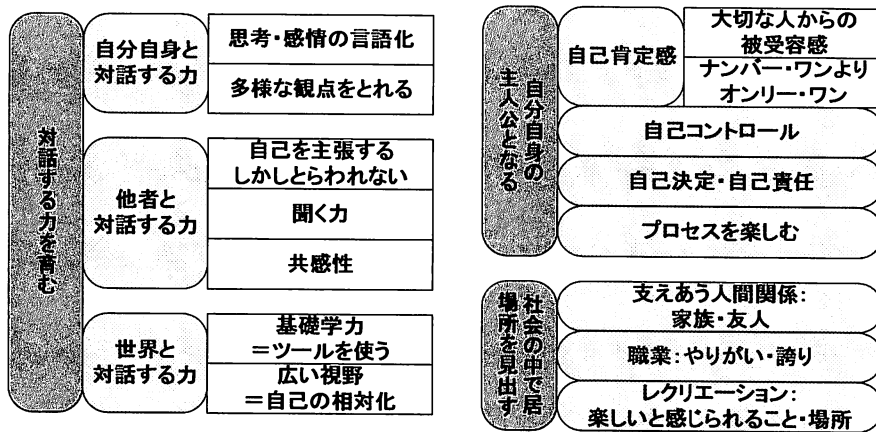


図4 社会で求められる力

4 「わかる」(心理学的理解)とは

(1) わからないことに耐えること

既述したように、少年鑑別所の大切な業務は、入所した少年がなぜ非行を犯すに至ったのかを分析し、その少年の将来のためにはどのような働きかけ(処分)が必要であるのかを家庭裁判所に対して提言することにある。そのために、個々のケースごとに関係職員による判定会議が開催されるが、そうした場で次のような発言を聞くことがある。

- 「家庭の指導力がなく、本人もわがままな甘えん坊で、よくあるタイプの少年ですよ。」
- 「この少年は、アスペルガー障害だから…。」

このような発言を聞きながら、「わかる」(人を理解する)とは何だろうと考えさせられる。昨今の風潮の一つとして、「この少年は、被虐待児だから…、発達障害だから…、両親間不和だから…」などと、すぐに『わかってしまう』ことが多すぎるのではないだろうか。「こころの闇」などと問題の本質を安易に子供の『こころ』に求めることを『心理学化』と呼び、その危険性を指摘する意見もある⁸⁾。

村瀬佳代子氏の講演会で、「臨床心理家に求められるのは、わからないことに耐えること」という言葉を聞き目を開かれる思いをした記憶があるが、問題の分析は教育・治療と結びついてこそ意味を持つてくることを心に留め、安易に専門用語をもて遊ばないこと、さらに言えば、人の心を『わかる』ことの難しさ、むしろわからないことに対する畏敬の念を大切にしなければならないように思う。

(2) 完璧な親も子もない

ケースの家庭・生育環境について考えようとするときに、いつも『こころに響くいい話』⁹⁾の一

節を思い出す。それは、女性の中学校教師が離婚した後、だまされて借金で困っているとき、別れた夫の許に残してきた長男が送金し助けてくれたという話であり、この一節を読むとき、いつも親子が引き裂かれる風景が目に見えるように感じる。

■ わが子の愛

自分が母として娘や息子を慈愛をもって育成したという過去があるならば、母親として困窮した場合、息子に救助を求めても別に不思議はないと思われますが、最初に述べたように私は長女 13 歳、長男 10 歳の時に離婚して、私に生活能力がないばかりに、心ならずも二人の子供を手放したという経緯があるのです。母親に甘えたい盛りの、特に小学校 4、5 年の男の子は自分を捨てた母親をどんな思いでいたことでしょう。

今でもはっきり思い出します。10 歳になったばかりの男の子は「お母ちゃん、お母ちゃん」と私を追い求め、常に私の愛を欲しがっていました。いよいよ明日私がこの家を出て行くという夜、長男と一緒におふろに入りました。長男は何度何度も、おふろの底へ沈んで行き、何か叫んで「お母ちゃん、僕何言ったか分かる？」と聞くのでした。「分からん、もう一度言って」と私。「僕ね、お母ちゃんと言ったんだよ」。私の涙はしゃぼんのあわと一緒に首を伝い胸を這い、膝から脚へと、とめどがありませんでした。

また、非行少年のアセスメントを行う場合、「非行の原因は彼らの家庭にある」という意見をよく聞く。確かに、これまでに私が出会った数多くのケースを思い返しても、それぞれに家庭内の事情・葛藤がある。しかし、その一方で、「問題のない家庭などといったものはあるのだろうか？」と考えさせられる。カナダにおける子育て支援プログラム「Nobody's Perfect」を紹介した『完ぺきな親なんていない！』¹⁰では、「はじめに」で次のように述べている。

- 人間は皆、欠点をもっています。完ぺきな人間などどこにもいません。完ぺきな親も完ぺきな子どもなど、存在しないのです。ですから大事なものは、可能なかぎりベストをつくすことです。そして必要なときには、まわりから助けを借りることです。

少年を理解しようとする際には、「わからないことに耐えること」、そして「完璧な親も子も家庭もない」ことを心に留め、「離婚」「家族間不和」などと簡単に「わかってしまう」ことなく、それぞれの家庭・親子の事情、家庭内の心理的な機微について、少しでも理解を深めるよう努めることが必要であると自戒させられる。

4 大人・社会に求められること

(1) バランスの取れたアプローチ

少年に対する就労支援の前提として前稿で紹介したように、アメリカ合衆国司法省少年司法犯罪防止部 (Department of Justice, Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention: OJJDP) は、非行少年対策の基本的な枠組みの転換として「バランスの取れた修復的司法」を提唱している。これは、少年事件の関係者としては、被害者、加害者、地域社会が、施設に収容する目的としては、応報 (罰)、更生 (教育)、威嚇 (予防)、隔離 (安全) が、少年に関わる刑事司法の目的としては、被害の回復、地域社会への再統合、地域の安全があるとし、一部の視点にとら

われず、すべての視点をバランスよく配慮した施策こそが必要であるとするものである（図5）。

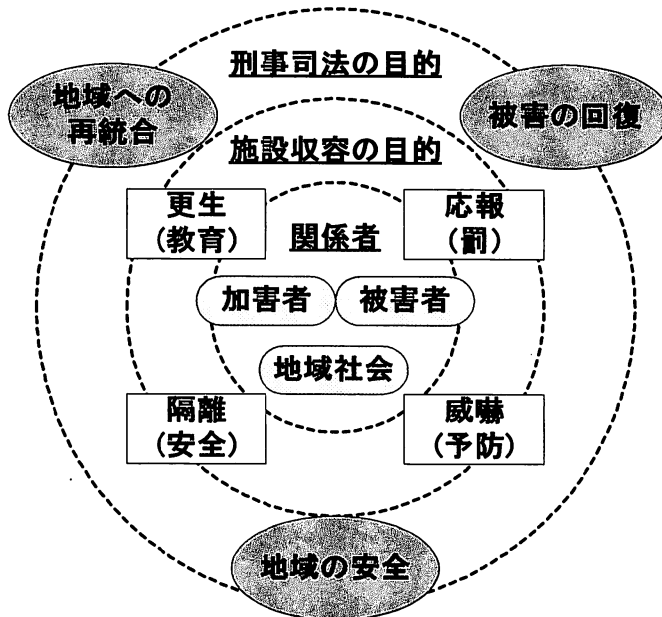


図5 バランスの取れた修復的司法

現在のわが国では、非行・犯罪をめぐる状況について、地域における治安への不安、被害者の心情に焦点が当てられることが多いように感じられる。私自身も犯罪被害者の方の講演を聞いた際には、いつまでも癒されることのない心の傷の深さを学ぶことができた。

その一方、加害少年の親・家族に対しては、非行の責任者としてセンセーショナルな興味や関心が向けられることが多いのではないだろうか。そして、加害少年の親に対する支援、収容施設の実情、少年が施設を出た後の生活等に関しては、真摯な社会的関心は依然として少ないのではないだろうか。

ここで、非行と向き合う親の会が編集した冊子から一節を紹介したい。

■ 自分をありのままで¹¹

Mの行動は未だに安心できるとはいえない。しかし、そんな彼を条件付きでなく、そのまま受けとめていけるかどうか、今、問われていると思う。私は子どもに対して、知らず知らずのうちに、親の思い通りに行動することを期待していたのだろう。そして、そんな私にMが突きつけたものは、自分をありのままで愛してくれるのか？ という問いかけだったのではないだろうか。

このMのことを通して、私は親としてばかりでなく、ひとりの人間としても自分の弱さや無力さを徹底的に知らされ、自分の足りなさをいやというほど思い知った。悩み、苦しみ、もはや涙も出ないかのようなこの数年間だったが、それは私にとって意味のある時となった。

こうした文を読み、非行と向き合う親の会の集会に参加し「自分の子供を非行少年にしようと思って育てる親はいない。」と涙ながらに語る様子などを見ると、被害者の方の話を聞いたときと同様に、これまでの自分の非行の捉え方があまりにも一面的であったことを反省させられる。そして、将来を展望した非行対策としては、時流に流されず全体的でバランスのある視点が欠かせないことを痛感させられる。

（２）理念・正義の再考

二十数年前になるが、カリフォルニア州の少年裁判所を訪問した際、先方の裁判所職員から、「日本では少年事件に弁護士は出席しているのか」と尋ねられ、私は、「まだ多くはない」と答え、日本における少年の人権保障が遅れていることを指摘されるのかと予期していたところ、逆に「それはよかった」と言われて驚いた経験がある。その職員によれば、裁判官から少年院送致を言い渡された場合、以前はほとんどの少年は「自分自身に責任がある。」と感じていたが、次第に「弁護士の弁護の技術が下手だったからだ。」と受け止める少年が多くなっているとのことであった。

最近の日本の少年鑑別所でも同様の経験をすることが次第に多くなりつつあるように感じられる。少年鑑別所に入所した後も、これまでの生活を反省したり、今後の生活について考えたりしようとするよりも、施設収容等の厳しい処分を何とか避けようと、「もっと腕の良い弁護士を探して欲しい。」などと両親に依頼する少年が増え始めている。また、面会場面でも、少年も保護者も深刻な様子がなく、少年は携帯電話の管理や友人への伝言などわがままを言い、保護者もそうした少年の甘えを許容した対応をする場面が多くなっているように感ずる。

もちろん、アメリカや日本の状況について軽々に一般化したり、少年の人権を軽んじたりするつもりは毛頭ない。しかし、わが国の社会全体に規範意識が希薄化しているのではないかという議論があるが、少年鑑別所におけるそうした最近の少年や保護者の様子は、同様のことを示唆しているように思われる。小此木圭吾¹²は、モラトリアム人間社会を、『自己中心思考が異常に肥大し、お互いが共有する自我理想（集団幻想）によって、個々人の自己愛を社会化・歴史化するアイデンティティがその機能を失った社会』とし、『アイデンティティ＝自我理想＝裸の自己愛』としている。現在の日本の少年たちの特徴としても同様に、自己中心的思考・自己愛のみが肥大し、社会的に共有されるべき自我理想や社会規範が機能しにくくなっていることを指摘できるのではないだろうか。

社会規範の希薄化について、国際的な視点から述べると、従来の日本の犯罪治安情勢については、発展途上国はもちろん、他の先進国に比べても優れた状況にあるとされていた。検事で国連アジア極東犯罪防止研修所所長も歴任した鈴木¹³は日本の刑事司法の量的な特徴として、①低い犯罪率、②高い検挙率、③迅速な裁判、④高い有罪率、⑤低い施設収容率を述べ、その背景にある質的要因として、①事件処理の統一性と一貫性、②市民からの信頼と協力、③関係職員の質の高さを挙げている。

一方、発展途上国が抱える問題を、私自身の国連機関での勤務経験に基づき、従来の日本の刑事司法の特徴と対比させて示せば、犯罪の多発、裁判の遅延、刑務所の過剰収容、地域間格差、市民からの不信、職員の腐敗等であるように思われる。特に、国際社会から長年の援助・莫大な経済的支援を受けながら、なぜ多くの発展途上国が、経済的な発展、社会生活の安定を果たせないのかを考えたとき、その基本にある問題は、社会に腐敗・汚職が蔓延していること、換言すれば社会的公正さの欠如ではないかと感ずることが多かった（図6）。

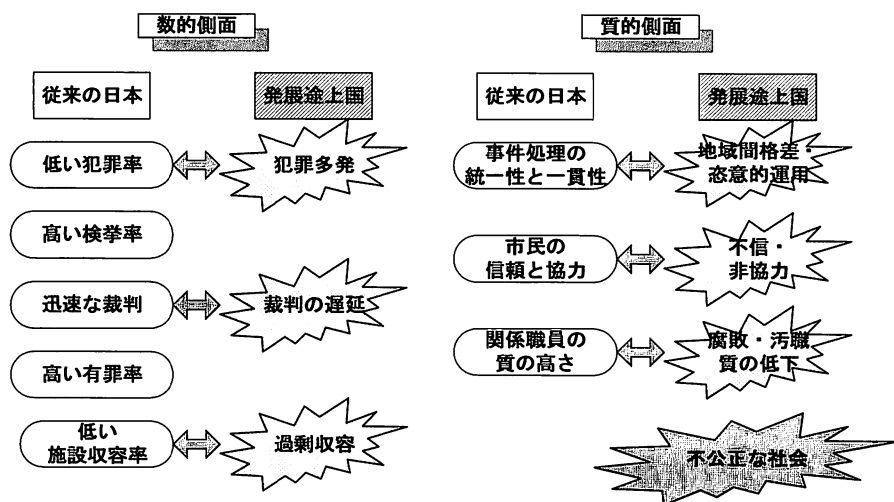
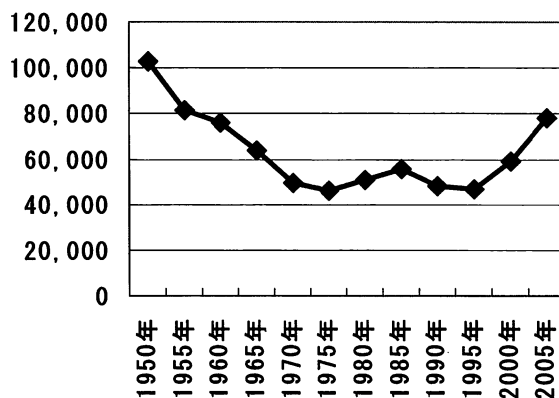


図6 日本の刑事司法の特徴

ここで、最近の日本の犯罪情勢については、種々の見方があるが、刑務所への収容が急増し、ここ数十年で初めて刑務所が過剰収容にあることはデータ上確かである。すなわち、従来の日本の状況（低い施設収容率）とは明確に異なっており、日本の刑事司法がおかれている状況が従来と異なりつつあることは明らかである（図7）。



注：平成17年版犯罪白書 資料2-5による。

図7 刑務所一日平均収容人員の推移

そのように、最近の日本の状況が従来の安心・安全といった状況から大きく変化してしまった原因については多くの議論がなされているが、一つには、従来の治安の良さを当然のように受け止め、その背景要因に対する配慮、特に市民からの信頼・協力の獲得、質の高い職員の確保を、将来にわたって持続的に可能とするような中長期的なビジョンに立った努力が不足したことが指摘できるのではないだろうか。自己中心的思考が肥大している今こそ、日本の社会全体で、経済

的發展及び安心で安全な社会の基盤としての公正な社会あるいは社会規範（自我理想）の大切さについて考え直す時期に来ているように思われる。

（３）おわりに

格差社会をテーマとした竹内¹⁴を参考にすれば、今、大人や社会に求められていることは次のようになるのではないだろうか。

- 金銭さえ儲ければいいのではなく、社会における理念や正義の役割についての再考。
- 努力しだいで生活がよくなるという将来への希望を若者が抱くことのできるような社会全体のビジョンの提示。
- 敗者復活の道筋・モラトリアム期間を認める制度的な工夫。
- それぞれの居場所に満足感と誇りを持つことのできる社会作り。

金沢少年鑑別所で試みた就労支援の結果¹⁵を見ても、中学校や高校からの落ちこぼれ意識が強く、将来に対して積極的な展望の持てない者、潜在的な能力を活かせず、劣等感や自信の無さが目立つ者が目立った。

また、現在の日本の刑務所には、施設収容を繰り返され一生のほとんどを刑務所で生活している者、職員に対する敵意が強く教育的な働きかけを受け入れようとしない者等が多数収容されており、過剰収容の一因となっている。しかし、彼らには、無邪気な寝顔を見せた時期、サンタクロースを信じ、枕もとのプレゼントに喜び飛び跳ねた子ども時代は無かったのだろうか、そして、もう少し早期に適切な働きかけがなされれば、彼らにとっても、社会にとっても、違った解決策があったのではないかと考えさせられる。

前稿では、最後の質問として「こころの豊かさとは？」を挙げた。安心で安全な社会を築くためには、社会全体で、今一度公正な社会の大切さとそれを維持するための持続的な努力の必要性を再確認するとともに、少年たちが画一的に評価され切り捨てられるのではなく、能力・適性に応じて将来への夢や希望の持てる社会、回り道や失敗に対しても、周囲から支えられやり直しの機会が与えられる社会を作り上げていくことが求められているように思われる。

¹ 黒澤良輔、「少年の再出発を支援する一少年鑑別所の現場から」、こころの科学 132 号，日本評論社，2007 年

² 梶田徹一、「子どもの自己概念と教育」，東京大学出版会，1985 年

³ 清永賢二，「少年非行の世界一空洞の世代の誕生」，有斐閣，1999 年

⁴ 法務総合研究所，「平成 17 年版犯罪白書」，2005 年

⁵ 内閣府人間戦略研究会，「人間戦略研究会報告書：若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～」，内閣府，2003 年

⁶ ドミニク S. ライチェン他編著，「キー・コンピテンシー：国際標準の学力をめざして」，明石書店，2006 年

⁷ 経済産業省社会人基礎力に関する研究会，「中間取りまとめ」，経済産業省，2006 年

⁸ 服部朗，「児童福祉と少年司法との協業と分業」，犯罪と非行第 144 号，2005 年

⁹ 高知新聞社出版企業部，「心にひびくいい話」，高知新聞社，1996 年

¹⁰ Janice Wood Catano，「完璧な親なんかいない」，ひとなる書房，2005 年

- ¹¹ 非行と向きあう親たちの会,「ARASHIーその時:手記・親と子の「非行」体験」,新科学出版社,1999年
- ¹² 小此木圭吾,「自己愛人間」,講談社,1984年
- ¹³ 鈴木義男,「国際的視野から見た日本の刑事司法」,犯罪と非行第50号,1981年
- ¹⁴ 竹内洋,「格差社会」,毎日新聞2005年11月14日朝刊
- ¹⁵ 黒澤良輔他,「少年鑑別所における職業キャリア形成支援の取組み」,矯正教育研究第51巻,2006年